場の言語学とは何か

本ワークショップは、場の理論に基づく言語学としての「場の言語学」の原理を明らかにし、ケーススタディを通して、「場の言語学」の理解を深めることを目的とする。

司会・発表１ :「場の言語学と認知言語学ーその統合と発展」
岡　智之（東京学芸大学）
発表 2 :「言語学における場の理論とは何か」大塚正之（早稲田大学）
発表 3 :「場の理論からみた言語」
井出祥子（日本女子大学）、櫻井千佳子（武蔵野大学）
発表 4 :「場における身体性と言語」河野秀樹（目白大学）
質疑応答・討論・総括

既に、物理学では、近代の「個物と因果関係のパラダイム」に基づくニュートン力学を越え、「場における事物の相互作用のパラダイム」に基づく「場の量子論」が一般的になっている。この場の量子論が立脚する考え方は、物理学のみならず、あらゆる学問研究の方法論として適用できると考え、その一般理論を「場の理論」と呼ぶ。発表 2 では、物理学、生物学など最新の科学的知見を援用しながら、一般理論としての「場の理論」の特徴を明らかにし、言語学への適用についての観点を提示する。それに先だって、発表 1 では、認知言語学と場の言語学の統合可能性について論じる。認知言語学は、要素還元主義の批判などいくつかの点で場の理論の観点と一致する。しかし、その「場所」のとらえ方は、「場の理論」における「場」のとらえ方よりも限定されたものである。なにより、認知文法が西洋近代科学の原理である「個と因果関係」や「主客分離、自他分離」のパラダイムに依存していることを指摘し、場の理論のパラダイムによる転換が認知言語学をより普遍的な言語理論へと高めることを提案する。発表 3 では、「場」とは何か、なぜ言語学に「場」の考え方が必要なのかを平明に明らかにし、具体的な言語現象として、あいづちなど話し言葉の同調現象を事例として、場の理論を基にした場の言語学のアプローチを紹介する。発表 4 では、場における身体的コミュニケーションの事例を挙げながら、場の理論における身体の位置づけ、そして言語との関係について論じていく。

場の言語学と認知言語学－その統合と発展

岡　智之（東京学芸大学）

1. はじめに

本稿では、場の言語学と認知言語学の統合可能性について論じる。まず、認知言語学の哲学的基盤と場所論の親和性について触れ、その上で、認知言語学でとりあげる「場所」の限界性に触れ、認知言語学がより普遍的で広範な言語現象を扱うために何が必要か、場の言語学がその理論的補完となりうる事を明らかにしていく。後半は、言語習得と心の理論の問題性について問題提起をしていく。

2. 認知言語学の哲学的基盤と場所論の関わり

2.1　認知科学の 3 つの主要な発見　－Lakoff & Johnson (1999)

認知言語学のパラダイムの哲学的基盤については、レイコフとジョンソンの共著「Philosophy in the Flesh」で主題的に論じられているが、そこで最新の認知科学の 3 つの主要な発見として、身体化された心、認知的無意識、概念メタファーがあげられている。このうち、身体化された心は、メルロ＝ポンティの身体論の継承であり、「場の理論」との関わりは、河野秀樹氏（本論文集）の論考で触れられる。次の「思考はたいてい無意識のものである」という認知的無意識の構造として、レイコフらは、基本レベル概念、意味論的フレーム、空間関係概念とイメージ･スキーマをあげている。これらは、すべて「場所」という概念と関係づけられる。基本レベル概念は、人間が身体で、環境即ち場所と相互作用できるレベルのものが基本的な概念になると言うことで、環境＝場所との関係が位置づけられる。また、意味論的フレームは、ある概念を理解するのに前提となるような知識構造といわれるが、この知識構造の枠というのは一種の場所的概念である。また、イメージ･スキーマは身体経験に基づいてつくられたイメージを構造化したもので、代表的なイメージ・スキーマとして、容器のスキーマや起点・経路・着点のスキーマなどは、場所的概念と関連している。それから概念メタファーというのは、抽象的概念は大幅にメタファー的なものであるというものだが、そもそもメタファーというのは、述語的同一性に基づくものである。例えば、「太陽は輝く」と「女性は輝く」は、それぞれの命題の述語「輝く」の同一性を基に、「女性は太陽だ」というメタファー表現が出てくるわけだが、この表現自体は主語論理としては矛盾したもので、述語論理あるいは場所の論理が適用されていると考えられる。

2.2　認知言語学の道具立てと場所論の関わり

次に、認知言語学の道具立てと場所論の関わりだが、まず、認知言語学の基盤となる認知能力としての「図と地」の分化の能力は、図がモノであり、地が背景であり場所ということから、モノと場所の認知に関係づけられる。認知言語学ではこの概念からベースとプロファイルやトラジェクターとランドマークなどの道具立てを開発している。その他、参照点構造や比喩がいかに場所論に関係づけられるかなどについては紙幅の都合上割愛する。詳しくは岡（2010，2013）を参照されたい。

3. 認知言語学のパラダイムの限界

3.1　メイナード（2000）での指摘

このように、認知言語学の理論や道具立ての多くに場所的観点が入っているわけで、認知言語学は場所論との親和性を持っていると言うことが言えるが、ここからはその認知言語学のパラダイムの限界性について触れていきたい。まず、認知言語学が取り扱う場所に対する批判として、会話分析などで活躍し、「場交渉論」という「場の理論」にもつながる立場をとるメイナード（2000）は次のように指摘している。

> 認知科学で理論化される場や視点は、あくまで主体と外界、つまり＜我とそれ＞の関係に焦点が当てられた場である（同 75）。認知言語学的な立場では、場所的な要素が言語の認知プロセス、構造、さらにその使用に影響を及ぼすことは認めているが、場における参加者同士の相互行為的事実を考察の対象とすることはない。視点は物や状況に向けられるのみで、あくまで一方通行の視線として捉えられている（同 125）。

つまり、認知言語学が扱う場所は、話し手と聞き手が相互作用する広い意味の場ではないということで、認知言語学が独我論的であるという語用論分野からの批判である。

3.2　ラネカーの認知文法のパラダイム

ラネカーの認知文法は、まず、動力連鎖やビリヤードモデルなどを事態把握の基礎においていることから、「個と因果関係のパラダイム」に基づいていると思われる。また、主観性と視点配列ということに関して、客観的視点を最適視点配列として標準的なものとし、自己中心的視点配列に移ることを主観化としている。英語などの西洋言語からは、いわゆる客観的事態把握が、中心的であるにしても、日本語はむしろ自己中心的視点、主観的事態把握が、典型的であることを考えると、ラネカーの観点は、西洋中心的な見方に偏っていると思われる。また、パラダイムとしては、「主客分離」、あるいは「自他分離」のパラダイムを標準としていると思われる。

3.3　場所理論とその継承としての「する」と「なる」の言語学（池上 1981）

日本において独自の類型論を立てた池上（1981）の、「する」と「なる」の言語学自体は、場所理論の拡張的試みである。ただ、場所理論で扱われている「場所」とは、話し手や聞き手が参加する広い意味での場ではなく、狭い意味での物理的空間を基礎としてその拡張として解釈される場所である。だから本来 localistic theory といわれるように、局所理論と呼ばれるべきものである。場の言語学の立場からは、それはかなり狭い現象を扱ったものであり、この観点を継承した、岡（2013）「場所の言語学」での格助詞研究自体がその延長として限界性を持ったものである。ただ、池上の最近の研究で述べられている「主観的事態把握」と「客観的事態把握」という類型論は、場に埋め込まれた視点すなわち「主客非分離の事態把握」と、場から独立した視点すなわち「主客分離の事態把握」という、場の言語学の観点とも相通じるところがあり、場の理論の観点から再解釈することが可能である。

4. 言語習得と心の理論の問題

4.1 トマセロの言語習得論と心の理論

ヒトは、「心の理論」（Theory of Mind）と呼ばれる認知能力を持つ点で、他の霊長類と大きく異なる（Tomasello（1999））。心の理論とは、他の個体を自らと同じような心を持つ主体として理解する能力であり、こうした能力こそがヒトをヒトたらしめているという。そして、幼児の言語習得は、生後 9 ヶ月以降に出現する、他者の意図を理解し、他者が第三者的物体に向ける注意を共有する能力、いわゆる「共同注意」（joint attention）を基盤として進行するとトマセロは主張している。そのこと自体は支持できるのだが、ここで問題なのは、ヒトの言語習得が、他者の意図を読むという心の理論によって成り立つという前提である。ここでは、自己と他者があらかじめ分離されており、そうした自他分離の立場から他者をどう理解するかという、デカルト以来の自他分離の立場から離れていないのではないかと言うことである。むしろ、自他非分離の中から共感性が生まれ、それを基盤として、言語が生まれていくという立場が構想されないだろうか。

4.2　「共感能力」が心の理論の基盤である－フランス・ドゥ・ヴァール（2010）

フランスは他者の意図を理解したり、他者の視点に立つことは人間だけの特性ではなく、類人猿やサルでも見られる特性であることを多くの事例で明らかにしている。フランスは、「心の理論」で見られる現象を「冷たい」視点取得と呼んでいる。なぜなら、それは、他者が何を目にし、何を知っているかをある個体がどう知覚をするかという点だけに注目しており、他者が何を欲し、何を必要とし、どう感じているかは、それほど問題にしないからだとしている。冷たい視点取得という能力自体はすばらしいものであるが、他者の状況や感情に関心を向ける別の種類の視点、すなわち共感こそが重要だとフランスは考える。フランスによれば、共感とは、同種の他の個体の感情や意図などを即座に感じ取り、同一化によって相手を慰めたり、相手と協同行動をとったりする能力である。共感はヒトのように高い認知能力がなくても多くの動物がやすやすと共感能力を持ち、それを生活に生かしているのである。現代の心理学者の多くが、共感の存在には「心の理論」（視点、意図など、他の個体の心を読みとる能力）が不可欠と考えているが、フランスは逆に、生物進化に深く根ざした共感能力が、そのような「心の理論」の基盤になっているという逆の発想をしているのである。

4.3　言語習得と共同性－浜田（1999, 2002）

言語習得と共同性との観点からは、浜田(1999)が、人は本源的共同性を出発点に、他者との関係性を通して、ことばの世界を敷き写し、「私」という内的世界を形成していくという構図を打ち出している。この本源的共同性は、同型性と相補性の二つに分けられる。同型性とは、二つの身体が出会ったとき、そこで相互に「相手と同じ型をとること」（共鳴動作）であり、相補性は相互に「能動と受動をやりとりすること」（「目があうこと」）である。この目があうという共同性を基盤として、ものを一緒に見るという 3 項関係が生まれ、こうした共同注意場面を通して、大人の意味世界が子供に引き写されていく。さらに、ここから大人と子供が、＜意味するもの（ことば）－意味されるもの（実物）＞を介した 4 項関係の中で、やりとりをすることを通じてことばが引き写されていくというのである。そして、「私」というのは、こうした他者との＜能動－受動＞のやりとりの中から生まれてきたものであるという。実体としての「私」（自我）というものがまずあって、そこからことばなどのコミュニケーション手段を通して他者との関係が形成されていくという構図とはまさに逆であって、最初にあるのはまず他者との関係性であって、そこから「私」が登場する

という。

また、浜田（2002:231-238）では、心の理論を証明するテストとして考案された「誤った信念」課題について、「この課題は、自分の世界とは完全に離れたところで描かれた舞台を、ただただ第三者的にみたときの、いわば観客的認知課題でしかない」としている。他者の生きている「もう一つの世界」がもっとも強く意識される場は、そうした観客的な場面ではなく、自分が他者と共に舞台に立ち、他者たちとその生身の身体で相互にやりとりする場面である。「誤った信念」課題とは、ある信念を「誤った」というときの視点（「観客」的視点）と、ある信念を持って行動していくときの視点（「当事者」として登場する人物の視点）が分離して初めてなり立つ課題であり、視点分離の問題であるとしている。しかし、私たちの生活世界の中では、いわゆる「観客」はいないわけで、誰もがそれぞれに自らの生活世界の舞台に上がり、周囲の他の登場人物たちとのあいだで、互いにやりとりしながら、「共通」と見える世界を作り上げているのである。

トマセロは、共同注意場面では、「子どもは大人が自分に注意を向けるのをモニターすることになると、それによって、自分を外側から見ることになる。それだけでなく、子供は大人の役割も同じ外側の観点から把握するので、総合的に言えば、子供は自分自身を役者の一人として含む全場面を上空から眺めているようなものである」（トマセロ 2006:134）と言っている。子供が他者の視点を取り得ることが重要だと言うことは否定しないが、果たして、子供がこのような「観客的」視点、いわば「神の視点」を持ち得ることが、ヒトがヒトたるゆえんとして言語獲得の根本的問題であると言えるのであろうか。「状況の内部からみる、当事者としての視点」をとる日本語のような「主観的把握」こそ、言語の原初的ありかたではないかという観点から考えると、言語の始原、あるいは言語習得の初期で、既に「客観的把握」が成立していると見ることは妥当であろうか。やはり、トマセロも西洋言語的見方、西洋近代的思考の陥穽に陥っているとは言えないだろうか。

フランスがいう共感や、浜田がいう根源的共同性は、ハイデガーのいう「共同存在」に通底する概念だと思われる。こうした共同存在性につながる思考法を前提とする言語学が「場の言語学」である。こうした立場からの言語習得、言語進化的研究が今後求められると考えられる。具体的には、やまだ（2010）の言語習得論[1]などがその手がかりを与えてくれると思われる。

５．結論

最後に、結論として、次のようなことを提起したいと思う。

- 西洋言語学理論（認知言語学を含め）は西洋近代パラダイムにとどまっている。
- ラネカーの理論をそのまま当てはめても、日本語の言語現象は解明できない。
- 日本語の現象をつきつめていけば、そこに「場の論理」「場の理論」が通底していることが分かる。

---

[1] やまだ（2010）は、乳児においては、「我」と「汝」が最初から基本的単位としてあるのではなく、二人が共存する「ここ」という心理的場所（トポス）だけがあり、そこでは、人は個としてあるのではなく、場所の中に溶け込んでいる、としている。このとき二人の間における情動を媒介にした響き合い、共鳴、相互作用、のような関係を「うたう」間柄としている。そのような関係を基礎にして、生後 9～10 ヶ月頃に指さしが現れると共に「乳児ーものー人」という三項関係が成立する。これを「並ぶ関係」としている。ここでは、我と汝が共にあるモノに視点を向ける、注意を共有するというのではなく、同じ「ここ」という場所において、自分が見たものを他者にも見せたいと願い、共鳴し、共感し、響存する、「並ぶ関係」の中から、ことばが生まれるとしている。

・　場の理論に基づいた言語学への転換が従来の言語学をより普遍的な言語理論に高める。

参考文献

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.

岡　智之（2010）「場所論の観点から認知言語学のパラダイムを再考する」『東京学芸大学紀要　総合教育科学系Ⅱ』第 61 集:pp.231-251.

――――（2013）『場所の言語学』ひつじ書房

浜田寿美男（1999）『「私」とは何か』講談社.

――――――（2002）『身体から表象へ』ミネルヴァ書房.

フランス・ドゥ・ヴァール（2010）『共感の時代へ』紀伊國屋書店.

やまだようこ（2010）『やまだようこ著作集第 1 巻　ことばの前のことば』新曜社

メイナード・泉子（2000）『情意の言語学』くろしお出版.

Lakoff,George and Mark, Johnson.（1999） *Philosophy in the Flesh*.　Basic Books.（レイコフ・ジョンソン　計見一雄訳（2004）『肉中の哲学』哲学書房）

Tomasello, Michael(1999) *The Cultural Origins of Human Cognition*. Cambridge, MA.: Harvard University Press.（大堀壽夫他訳（2006）『心とことばの起源を探る－文化と認知』勁草書房.）

言語学における場の理論とは何か

早稲田大学　　大　塚　正　之

１　場の理論とは何か

場の理論は、近代の要素還元主義的な個物と因果関係に基づく考え方に対置されるもので、物理学におけるニュートン力学が近代を代表する要素還元主義的考え方であるとすると、場の量子論が立脚するのが場の理論であると考える。この場の量子論が立脚する考え方は、物理学のみではなく、あらゆる学問研究の方法論として適用できると考え、その一般的な理論を構築することを目標とするのが場の理論であり、その特徴は次の点にある。

ア　個物と因果関係から場における相互作用へ

個物に着目し、それが個物としての同一性を維持したままその外界からどのように影響を受けるのかを考えるのが近代の要素還元主義であるが、場の理論は、個物から出発するのではなく、場から考える。場というものがまずあり、その中で様々な事物が相互作用している。これをそのままの相互作用として捉える。「因果関係」ではなく「相互作用」という点が重要である。例えば人間などの生命体は、コンピュータが環境から情報を取り入れて分析し役立てるような仕方で進んでいくのではなく、生命体それ自体が環境によって創られていくのである。絶えず、生命体は、環境との相互作用により、変化しており、コンピュータで言えばＣＰＵそれ自体が環境によって変化していくのである。生命体の活動は、環境が個物を変え、個物が環境を変える相互作用であると捉える点に場の理論の第一の特徴がある。

イ　全体は、個々の要素の寄せ集めではない。

場の理論の第二の特徴は、個々の動きを追い求めても、全体の動きは分からないという点にある。個物が集まって全体を作っているのだから、個物を集めれば全体が分かるというのが近代の考え方であるが、実際には、個物を集めても全体にはならない。そのため、物理学では場というものを考えなければ説明できなくなり、経済学では、ミクロ経済学とは別にマクロ経済学が必要となり、生物学では、個々の細胞や生命物質が置かれている全体構造の中で生命の働きを考えなければならなくなり、脳のシステムも、個々の細胞におけるイオンの出入りやシナプス接続における神経伝達物質の動きを見るだけでは分からず、脳の機能全体という場の考え方を取り入れざるを得なくなっている。現在、あらゆる分野において、要素に分解するだけでは分からず、全体的な場の方から考える考え方の必要性が自覚されつつある。そして、言語学もその例外ではなく、周囲の環境を無視しては言語の本質は分からないことが分かるよ

うになってきたのである。場の中に個物（原子、細胞、社会、言語など）を置いて、場の方から、その動きを探るのが場の考え方である。その背景には複雑系の科学が存在する。物理学における不確定性、数学における矛盾性にみられるように、この世界には、至る所に矛盾が存在し、かつ、不確定性が存在している。計算不可能であり、予測できない系が存在している。原理的にどのような動きをするかが決まっていない領域が存在しており、人間の活動も例外ではない。ランダムな活動から混沌（カオス）の状態になってしまう系の中に、ある秩序を持った存在が構築されることがある。このランダムな動きから秩序が生成される場合を「自己組織化」と呼んでいる、生命というのは、ランダムな因子により様々な遺伝子の変容を受けるが、ある場合には、そのランダムさの中に秩序が生まれることがある。これが生命体の自己組織化現象である。つまり複雑系における自己組織化のプロセスの中で生命体は進化という現象を示すのであり、どのように進化をするのかについては確定的な法則性は存在しない。生命体と環境との相互作用の中で、生命体は自己組織化して進化したり、自己組織化できず、消滅したりする。個体レベルで言えば、環境に適応する過程で、うまく自己組織化ができたとき、それが生き残っていくのであり、論理的な必然性は存在しない。したがって、生命体と環境との全体的な場を捉えて、そこから考えないと、個物を追いかけて行っても、どうなるのかの予測は不可能なのである。素粒子の軌跡を追い続けることはできず、場の中で波動方程式を考える必要があるのと同じである。この個物の寄せ集めからは全体は分からないというのが場の理論の第二の特徴である。

ウ　場において個物は生成死滅する。

場の理論の第三の特徴は、個物よりも構造に着目する視点である。我々は個物が個物として固定的に実在すると考えているが、実際には、そのような個物は固定的に実在するものではない。我々の身体や意識を創り出している私というものは、日々、部分的に入れ替わっている。新しいタンパク質は、３箇月程度ですべて別のタンパク質に入れ替わり、すべての細胞は、１年以上経過すれば、ほとんど別の細胞に入れ替わってしまう。同じものはないのである。それは物としての同一性ではなく、構造的同一性である。例えば、生命体の免疫系は、個物としてのウイルスを認識するのではなく、ウイルスの型を認識する。個物としてのウイルスは、一度白血球により消化されてしまえば、死滅する。だから同じウイルスが体内に再び入ることはあり得ないし、そのような個物を識別して、免疫機構を創っても役立たない。重要なのは、ウイルスの構造である。同じウイルスは同じ構造をしている。だから、別のウイルスが入ってきても、その構造に対する免疫機構ができていれば、多少変異をしても、免疫機構が働く。この型が異なると働かない。だからウイルスは型を変容させて免疫機構から逃れようとする。このような認識をパタン認識と呼んでいるが、生命体は、個物を識別するのではなく、このパタンを識別する。一定のパタンを現出させる場というものを考えると、その場の中では、個物としてのウイルスは生成死滅するが、一定のパタンを現出させる場があれば、似たようなウイルスが生成される。そこでは、個物としてのウイルスを考えるのではなく、場に

おけるウイルスの型の構造をみることが必要である。場の中で、個物は生成死滅しているのである。経済や社会の動きも、個々の生成消滅する経済主体に着目しても分からない。重要なのは、その場の構造なのである。このように個物は場の中で生成死滅するのであり、重要なのは個物ではなく、その個物が生成死滅する場の持つ構造であると考えるのが場の理論の第三の特徴である。

２　場の理論からみた言語学

このような場の理論から言語を考えてみたい。言語も人間という生命体の活動であり、人間に言語能力が備わるに至ったとしても、それもまた複雑系におけり自己組織化である限りにおいて、場の理論に馴染むと考えることができる。

第一に、言語は、コミュニケーションの手段であるという点において、一方向的なものではなく、相互作用である。ある人が言葉を発した場合、その聞き手は、その言葉の持っている意味を発話者と共有している必要がある。その音声を同じ意味を持つものとして情報が共有化されていなければ、言葉としての機能は発揮できない。言葉は、複数の主体者の間で形成される場において意味を持つものであり、場における相互作用として考えるのに適している。

第二に、個々の言語を寄せ集めてもその性質はよく分からない。意味とは差異性であり、お互いの関係性が分からないと言語の持つ意味は分からない。また、言葉を寄せ集めても、全体の意味は、個々の言葉の意味の集積ではなく、新たな意味を生み出すのであり、個物の寄せ集めが全体ではないという性質を言語は持っている。

第三に、個々の言葉は、発せられる都度、消滅していく。そこで重要なのは、言語の構造である。個々の言葉の持つ意味が、全体の構造の中でどのような意味を持っており、文法構造の中でどのような役割を果たしているのか、その文章としての全体の構造が重要であり、その点において、言語は、場の中で生成死滅するものとして捉えることができる。

それでは、言語学において、このような場の理論を考えることにどのような意味があるのだろうか。これまでの言語学は、言語に独自の法則があるとして、その法則を探求してきた。そしてある程度普遍性を持つ文法構造が存在しており、この文法構造を認識し、統合できる能力が人間には先天的に備わっていると考えられてきた。しかし、それは決して生来的に人間に固定されたものではなく、場の中で自己組織化しながら形成されてきたものだと考えるのが場の理論である。そのことによって、対格言語だけが唯一の言語なのではなく、活格言語や能格言語も、それぞれの場において自己組織化されたものと考えることができる。言語のパタン（構造）が習得されることで、これまでに出会ったことがない言葉に接しても同じように使うことができるようになる。わずかの例から未知の言葉が使えるようになるのは、このようなパタンを習得する仕組みがあるからだと理解することができる。

こうした言語の構造は、人間の認知のシステムとして生まれるものであり、その認知を形成する環境とは無縁ではない。認知言語学は、そのような視点に立っており、これ

によって言語の本質へアクセスすることが可能となる。言語が場における相互作用である限り、認知する主体や環境と離れたところで言語を考えることはできないのである。場の理論は、認知主体が環境との間で相互作用するという視点で捉えるのであるが、その特徴は、個々の認知と環境との相互作用を、場の方からみること、そして個別的な現象としてではなく、場における構造として捉えること、個物と環境とを切断することなく、1つの構造として捉えること、その意味に於いて、主体と環境とを一体的に捉えるのである。また、個物と環境との相互作用という場合、そこでは、身体と環境、身体と身体の相互作用が存在しており、身体と身体とも共感性を持って響き合っているのであり、その構造も言語によるコミュニケーションも密接に結びついていると考える。意識と身体とは一体的に作用しているのであり、このような全体的な相互作用として、意識と身体、主体と環境を捉え、そこにコミュニケーションを成り立たせている構造を全体として明らかにしようというのが場の言語学の考え方である。

そのためには、絶えず、身体と意識、主体と環境とがどのように相互作用をしているのかの実証的研究が必要であり、そのような実証的資料から、そこにコミュニケーションを可能とする構造を取り出すことが必要であり、これが場の言語学のこれからの課題である。

（以　　上）

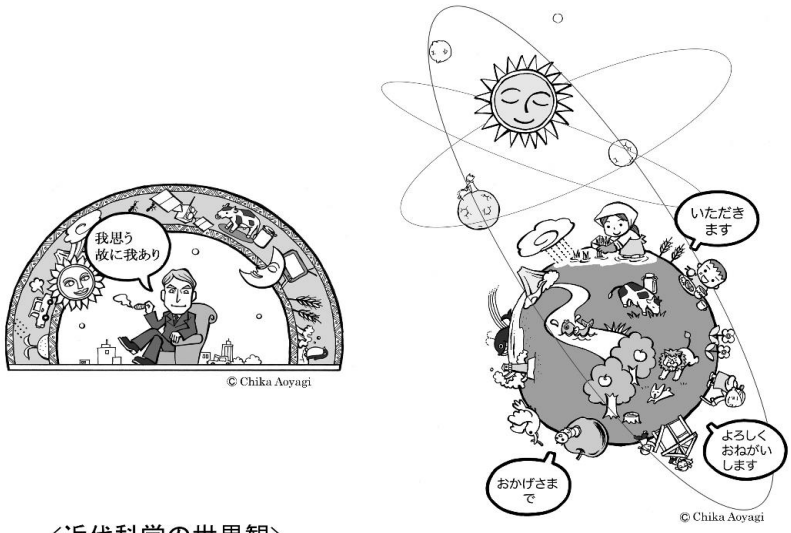
「場の理論」から見た言語

井出祥子（日本女子大学）・櫻井千佳子（武蔵野大学）

１．はじめに

本稿は、ポスト・モダンの科学の見方で言語研究を行う試みの第一歩である。ポスト・モダンの科学とは、図１に示すように宇宙や地球全体の中に個物が関係しあって存在するという場の考えに立った世界観を基にする科学である。このポスト・モダンの科学とは、デカルトの「我思う故に我あり」で知られる確固たる自己の発見に始まり、主客二元論の下、要素還元主義で科学技術を発達させてきた近代科学を取り込み、それをさらに広い視点で考えるパラダイムを拓く試みである。

図１　近代科学の世界観とポスト・モダン科学の世界観



〈近代科学の世界観〉　〈ポストモダンの世界観〉

２．何故場の考えが必要なのか

Ide(1989)、井出（2006）では、日本語のポライトネスに応じた言語使用は、「わきまえ」という概念のもとに行われる言語行動であるとした。しかし、わきまえの語用論は、発話行為理論、B&L のストラテジーによるポライトネス理論などのように分析的ルールで説明出来るものではなく、また、社会言語学の変項（上下、親疎などの要因）でも説明しきれない。では、何によって説明されるのか。わきまえによるポライトネスのメカニズムは複雑系の問題である。それゆえに、従来の科学的方法を超えた場の考えにその糸口が求められることになる。

また、ポライトネスに応じた言語使用以外では、日本語にみられる多様な人称詞やモダリティ表現は、指標性の高いものであるゆえ、複雑系のアプローチによりその使用のメカニズムが説明可能になると考えられる。Levinson（1983)でも、東アジアの諸言語の人称詞の多様性について言及されており、そのメカニズムの解明が求められて久しい。また、日本語の構造上義務的な表現としてのモダリティ表現については、時枝（1941）において「詞と辞」として、また多くの研究者によっ

て「命題とモダリティ」としてその多様性が論じられているが、その使い方のメカニズムは解けていない。また、ディスコースレベルにおいても、あいづちや終助詞などの会話の相互作用現象について研究がなされているが、そのような現象を一貫して説明する言語使用のメカニズムについては、さらなる研究が求められている。つまり、現状では、英語と比較した日本語の諸特徴について、それぞれの理由の説明がされているが、諸理由を一貫性のある論理で説明するのは容易ではなく、そのような論理が望まれている。本稿では、場の考えには総合的な説明の可能性があると考え、「場」を空間的、時間的な意味的スペース（semantic space）と捉え、近代科学の限られた世界観から脱却し、場の世界観に基づく認知言語学の諸問題を考えることとする。

井出（2006）では、以下のように結語として問題提起がされている。「複雑で多様な人称詞やモダリティ表現が場で使われるメカニズムの解明には複雑系のアプローチが求められている。この真理にたどり着く道は緒に就こうとしている。」この問題提起への答えの第一歩として、本稿では、「場の理論」からの再考を試み、場の言語学の糸口を探る。

３．主観的・客観的事態把握の言語表現

認知言語学では、池上（2006）、中村（2006）で指摘されているように事態把握として、客観的事態把握と主観的事態把握があることが言われている。具体的な言語表現で見てみると、岡（2012）で論じられたように、客観的事態把握として‘They are approaching to Tokyo.’のような表現に対して、主観的事態把握である「東京が近づいてきている」という表現があることを指摘している。このことをふまえ、川端康成の小説『伊豆の踊子』のあるシーンにおける言語表現とサイデンスデッカーの英訳を比較すると、どのような事態把握の異なりが見られるだろうか。

図２　『伊豆の踊子』にみられる事態把握の言語表現

川端康成『伊豆の踊り子』からのシーン　サイデンステッカーの英訳

図２にあるように、日本語の「高等学校の学生さんよ」という表現に対し、英語では‘He is a high school student.’という訳がつけられている。日本語は、主語（he）、動詞（is）、冠詞（a）などがない主観的事態把握による言語表現である。一方、英語では、主語（he）、動詞（is）があるが、敬称（さん）や終助詞（よ）などがない客観的事態把握による言語表現である。これを場の考えで捉え直してみると、日本語の主観的事態把握による表現は、自他非分離（内的）の視点であり、英語の客観的事態把握による表現は、自他分離（外的）の視点であると考えることができる。つまり、場の考えからみた主体的事態把握とは、話し手・聞き手が場の中に埋もれた視座を持って発話して

いる言語表現である。場の中では、話し手は場の中にある自分と指示詞（高等学校の学生）との関係を「さん」という敬称で指標する。話し手は聞き手との人間関係を「よ」という終助詞を使うことで、親しさと共に、あなたの知らないことを教えてあげましょう、という心情を指標している。

４．場について

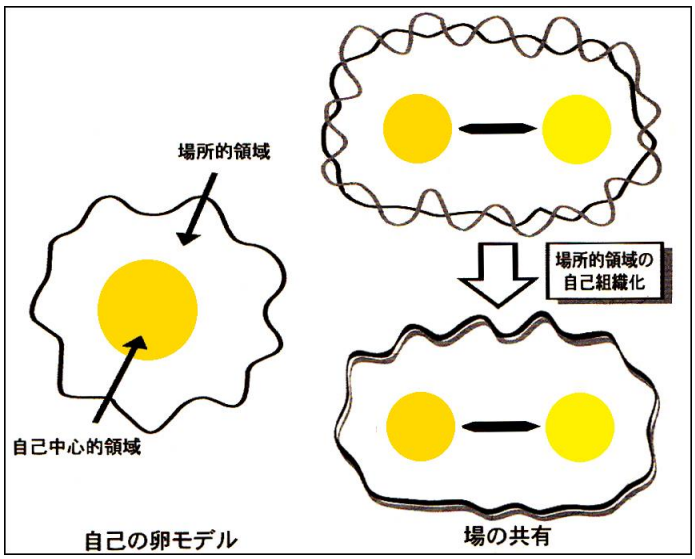
ここで、本論が基盤とする場の理論についての説明を行う。場については、いろいろなアプローチがありうるが、ここでは清水博（1978、2000、2004）の唱える場を基盤として考える。清水によれば場とは、セマンティックなスペース（場所的・時間的）のことである。

清水は、生命とはどういう現象であるかを問う研究で、筋肉から取り出したタンパク質の分子を流動させる実験を行った。最初はバラバラに動いていた分子のミクロな動きが刺激し合ってマクロな流動となり、ある一定のところでそれ以上増えない状態に達する。この現象を物理学の理論で導きだした。清水は、ミクロな動きが次第に自己組織化してマクロな流動になるのは「そこには、場というものがある」からと考えた。この場の存在は、複雑系のモデルの一つとして知られている。

場はフレームと同じでないかと思われる向きもあるが、そうではない。フレームが人間の認識の範囲で捉える枠組みであるのに対し、場は認識を超える枠組みである。人間は場の中に埋め込まれていると捉える考え方であり、無意識的な領域も含んでいる。このようにフレームとは次元を異にしている。

「場の理論」では自己とは何かについて、近代科学の基本的考えと異なる捉え方をする。清水（2000、2004）によれば自己は図３に示されるように二重性があるとする。

図３　自己の二領域性　清水（2000、2004）から



自己は、卵の黄身に喩えられる自己中心的自己とその周りにある卵の白身に喩えられる場所的自己[2]からなっている。場所的自己とは、私達が普段後ろから歩いて来る人が追い越そうとしているのを気配で感じて道を譲る時の意識下の気づきのように、ほぼ無意識に感知するものである。図にみるようにボールに割入れた二つの卵の白身が融合してその境界がわからなくなるように場所的

2　場所的自己は、遍在的自己と同じものを指す。

自己は自己組織化して融合し、分けられない自他非分離の状態になっている。そこには場が創られている。場所的自己の領域は、卵の白身のように限られた量の領域とは限らない。話し手と聞き手の存在する場のように限定的なこともあるが、一方では、地域社会や国を超えて地球全体まで限りなく広い時間的空間的場所を含むこともある。

つまり、近代科学では事象を客観的に捉え、主体とは切り離して見る視点をとるが、「場の理論」では、主体は場の中に埋もれている視点をとる。話し手も聞き手も第三者も環境も場の中の一要素であるという視点で談話現象を捉える。

前述の主観的事態把握と客観的事態把握の対比を場の理論でとらえると、主観的事態把握である「高等学校の学生さんよ。」という表現は、話し手（伊豆の踊子の姉）と聞き手（伊豆の踊子）の関係を指標しており、その視点は、二つの卵の中にいるものとして考えられる。つまり話し手と聞き手は場を共有している状態であるといえる。そのような場に埋もれた視点をもつ話者は、伝えたい情報である「高等学校の学生」のみを有標の「図」として認識して発話しているのであり、会話参加者に知覚され共有されている情報、つまりここでは無標である「地」は言わなくてもよいと判断しているのである。このような観点からとらえると、「高等学校の学生さんよ。」という表現のような主観的事態把握は、省略が有効に行われている、より経済的なコミュニケーションであると考えることもできよう。

５．「場の理論」による話ことばの同調現象

あいづちについて、その頻度の高さなどから日本語の会話における特徴的な談話現象としてこれまで多くの研究がなされてきた。Kita and Ide (2007)は、あいづち、うなずき、終助詞が共起する傾向のある日本語談話に注目し、これらは同調現象によるものと論じている。水谷（2008）は、話し手と聞き手が一体となって談話を進行させ傾向が強い日本語会話の特徴を対話ではなく共に作り上げる会話という意味で「共話」と呼んでいる。岩崎（2008）は、会話の発話単位が協調的に構築される現象を観察する中で、「引き込み」という話し手と聞き手が協調して談話を進行させるメカニズムを分析している。いずれも、日本語の話者が聞き手と協調して話すことに注目して人の社会的行為を明らかにしようとするものである。これまでの談話研究では、話し手が、自分の意志を聞き手に伝達するというモデルを基に、あいづち、うなずき、引き込みのような談話現象が論じられてきた。

「場の理論」でこの現象を考察するとどのような解釈が可能であろうか。談話の中に埋もれた視点で談話現象を観察し、また話し手と聞き手の自己には自己中心的自己の他に場所的自己があり、話し手と聞き手の場所的自己が融合しあっている、という「場の理論」を仮説としてあいづちの同調現象を考察しよう。

「あの基礎英語の(ハイ)テキストがですね、・・・」
「少しこう、やる気がおこるような(ハイ)内容のほうがいいと思いますので・・・」
ラジオ講座の講師と相手との会話からの抜粋：水谷（2008：21）

あいづち「ハイ」は、修飾語と名詞の間に発せられている。ということは、聞き手が話し手の話す内容の意味が分かる前に発した発話である。話すこととは、話し手が聞き手に意思を伝える、と

いう会話の前提で捉えると、このあいづち「ハイ」はどう解釈されるのであろうか。ここで「場の理論」の前提を適用してみよう。これはラジオ基礎英語番組の講師が話し手、アシスタントが聞き手という場面での会話である。会話のジャンルとして、話し手と聞き手の役割が異なり、二人で協力して英語教育のラジオ番組進めるという共通の目的をもった会話である。この会話は放送局の録音室で時間も厳格に規定されている中で行われている。そこでは、話し手と聞き手は幾分緊張して、ラジオ講座の番組を行っているという場の中に身を投げ出して一体となって話を進めている。あいづち「ハイ」は、卵のモデルの白身で現される場所的自己の中にいる聞き手と話し手が身体的に共有された場[3]において発せられていると解釈される。「ハイ」を発している本人は意思を伝えるための発話をしているのではなく、ほとんど無意識的に発していることであろう。録音室で会話する二人の間には、身体的リズムの同期現象であるエントレインメント（引き込み）がおきていて、それによって二つの卵の白身は自己組織化して場を創りだしていると考えられる（坂井・三輪 2010）[4]。あいづち「ハイ」は、場所的自己が顕在化している場において、話し手と聞き手が自他融合している中で身体的、無意識的に発せられている。これがあいづち「ハイ」の「場の理論」の視点からの解釈である。

同様なことは、Kita and Ide (2007:1247-48)の日本語会話におけるあいづちと共起するうなずきの解釈にも適用されよう。また、岩崎（2008）は、話し手の発話単位内への聞き手の介入の現象「引き込み」のメカニズムを視線、頭の動き、手の動きなど身体的資源も視野に入れてマルチモーダルな方法で分析的に解釈している。これも、会話参加者の内的視点から捉え「場の理論」で再考する解釈を加えることができるのではないかと考える。

６．おわりに

本稿では、「場の理論」を基にした場の言語学のほんの一端を紹介した。現代科学は物事を客観的な視点で観察、分析、考察することをその常道として社会に多くの恩恵をもたらしてきた。しかし、そのような見方がすべてであるとは言い難い。それ以外の見方で言語現象を捉える方法として、モダリティ表現や会話の同調現象を例としてそこでどのように主観的事態把握がなされているかを「場の理論」との関連で論じた。

「場の理論」を使ったアプローチで人称詞、モダリティ表現、能格言語性、指標性、証拠性、異主語構文など日本語に特徴的な言語・談話現象の再解釈が可能になると考える。また、現代の科学で発見されたミラー・ニューロンやエントレインメントなどの知見を融合的に取り入れることで、言語研究の視野を広げ、超領域的に考察する道が拓かれるものと考える。それは、要素還元主義主導のアプローチから複雑系のアプローチである場の考えに大きくシフトすることによって可能になる。

---

3 河野（本予稿集）によれば、人間はコミュニケーションにおいて共振、身体的同調をおこしている。

4 清水の「場の理論」をその基盤として発展させているコミュニケーション研究において坂井・三輪（2010）は人間同士の即興的なコミュニケーションを成立させるために必要な舞台としての場において、会話参加者がつくりだす身体リズムの同期現象であるエントレインメントの研究を行っている。

参照文献

Ide, Sachiko (1989) Formal forms and discernment: two neglected aspects of universals of linguistic politeness, *Multilingua* 8(2-3): 223-248.

井出祥子（2006）『わきまえの語用論』大修館書店

池上嘉彦（2006）「＜主観的把握＞とは何か」『言語』５月号: pp.20-27.

岩崎志真子　（2008）「会話における発話単位の協調的構造—「引き込み」現象からみる発話単位の多面性と聞き手性再考—」『「単位」としての文と発話』串田秀也、定延利之、伝康晴（編）ひつじ書房

Kita and Ide (2007) Nodding, *aizuchi*, and final particles in Japanese conversation: How conversation reflects the ideology of communication and social relationships, *Journal of Pragmatics* 39 (7): 242-1254.

Levinson, Stephen　(1983)　Pragmatics. Cambridge University Press

水谷信子　(2008)「話しことばの文法—英語との対照を中心に一」『日本語学』27(5): pp.16-22.

中村芳久（2006）「言語における主観性・客観性の認知メカニズム」『言語』5 月号:　pp.74-82.

岡　智之（2012）「場の言語学と認知言語学–その統合と発展」日本認知言語学会第 13 回大会、ワークショップ発表　2012 年 9 月 8 日

坂井志郎・三輪敬之(2010)「場の共創出におけるエントレインメントの二重性」一般社団法人電子情報通信学会電子情報通信学会技術研究報告．HCS, ヒューマンコミュニケーション基礎 109(457), 23-24.

清水　博　(1978)　『生命を捉えなおす一生きている状態とは何か』中公新書.

清水　博（2000）「共創と場所–創造的共同体論」『場と共創』清水博編　NTT 出版 23-177.

清水　博---- (2004)『自己に関する科学的研究』場の研究所文庫　Vol. 3

時枝誠記（1941）　『国語学原論』岩波書店

「場」における身体性と言語

目白大学日本語･日本語教育学科　河野秀樹

1. はじめに

我々の言語活動を「場」の視座からとらえなおすにあたり、「場」とはそもそもどのような実体を持ち、どのように認識・共有されうるのかについての理論的枠組みの整備が不可欠である。なかでも、個を取り結び集団全体としての表現を創出する原理としての「場」のはたらきが、どのような性格のコミュニケーションに依拠しているのかについての議論なくしては、「場」のはたらきの全容を明らかにすることは困難である。

「場」とは、個としての人間の存在形態を包摂し、個人間の相互作用の基底にはたらく関係生成の原理として了解されうるが、そうした「場」の作用は我々の意識化された活動に先行してはたらくため、「場」のはたらきは「身体」を介して感受する形ではじめて自覚されると考えられる(河野, 2010)。そこで本稿では、人間相互のコミュニケーションを通じて生成される「場」における身体性の意味と役割について、「場」の理論における「身体」の位置づけを提示したうえで、個人と環境を結ぶ身体のはたらき、および対面状況での「場」生成における個人間の関係をとりもつ身体のはたらきの性格と実体について、現象学的身体論、生態学的認識論などからの知見や関連する調査結果を参照しながら考察する。そのうえで、「場」の生成において、言語がどのように「身体」の機能を補い、さらには「身体性」を持ったはたらきとして機能しうるかを試論として論じる。

2. 清水の「場」理論における身体のはたらき

人間のコミュニケーションにおける「場」を、本稿では、「特定の時空間を共有する個人の集団において、個人の振る舞いのあいだに整合性をもたせながら集団全体の表現を自律的に生み出す関係性の枠組み」と定義するが、「場」の性格と身体との関連を論じるうえでの理論的準拠枠として，本稿では清水博の「場」の理論を援用する。清水(1996)は生命科学研究からの知見にもとづき、あらゆるレベルの生命要素には相互に整合的な関係を自己組織的に生成し、集合的に一つの生命システムとしての表現を創出する能力があるとしたうえで、こうした全体的な秩序を生む協働を可能にしているのが「場」のはたらきであると結論する。清水によれば、「場」のはたらきは、ミクロのレベルでは個体の発生･分化などにみられる細胞間の協働を成り立たせるが、生命要素としての我々人間のあいだにも上位機関の働きかけによらず秩序立った関係が自発的に生まれ、集団全体としての表現が創出されるのは、個人の振る舞いのあいだに整合性をもたせ、集団全体としてのまとまりをもたらすよう、個人の行動の選択に一定の拘束条件としての「場」が作用するためである。

こうした「場」のはたらきを取り持つのが「場の情報」であるが、「場の情報」とは、状況的・環境的要因の総体としての「場所」における個人の位置づけを決定する、一種の操作情報である(清水, 1999)。清水によれば、特定の記号体系によらず授受、共有される「場の情報」は、いわゆる暗黙知(Polanyi, 1966)として言及されるような記号化のできない情報であり、それは「身体」を介して直接的に「場所」のイメージとして自覚され意識にのぼる。具体的には、「場」の情報は「場所」の印象、雰囲気などといったしばしば情意的意味づけを伴って、外界の分節的認知をもたらすと同時に、環境と交錯する自己の有り様を内的感覚として表すことになる。清水(2000)はこうした自己

の存する「場所」全体の状況把握を，場所の状態が「身体」に「映し出される」ことによると記述する(p. 97)。個人はこうして感受した「場所」の状況に合った行動の選択と、それに応じて現出する新たな「場所」の状態の把握との円環的プロセスを通じて、場所の状態と自己の振る舞いとの意味的整合性を高めていく。このように、「場」が機能するためには自己の「身体」を通じた直接的な環境との相互作用が必要であることを、清水の「場」の理論は示唆している。この、「場所」の状態を映し出す「身体」の実像について、清水は体系的な記述はしていないが、「身体」とは可視的な肉体や生体機能にとどまらず、暗在的情報授受の媒体となるような、脳を含む我々の身体の機能全般、さらには情動や直感といった心的はたらきを含む概念であることを記している（清水, 2000）。

「場」における身体性のもう一つの重要な側面が、「場」を共有する個人のあいだに自己組織的になされる関係生成をとりもつ主体としての「身体」の存在である。清水（2000）は、「場」が共有されるのは、我々には個我を中心とする「局在的自己」とは別に、自他非分離的な「遍在的自己」としての存在形態があるためであり、そのはたらきによって個人の間には暗在的なコミュニケーションが起きているとする。そのうえで、いわゆる身体的同調現象はこの自他非分離な自己が個人間に生成し、共通のコンテクストを創り出す「共創」が起きている印であると清水は説明している。特に共空間内での対面状況においてこうした同調作用を生むメカニズムを説明する概念として、清水は「エントレインメント」と呼ばれる、相互の身体的表現や生理機能のリズムの引き込み現象に言及している。

3. 環境の認識と間主体的関係生成における身体の自律的はたらき

こうした、「場」における個人と環境、および個人と個人を結ぶ「身体」は、「もの」としてではなく身体の「はたらき」として捉えた方がその本質を理解しやすいと思われるが、この「はたらきとしての身体」の概念を中心に、環境との交わりのなかで自らを拡張し他者とのつながりを結ぶ「主体」としての身体論を展開するのが市川浩である。市川(1992)によれば、「生きてはたらいている身体」は、皮膚によって外界と区分けされた解剖学的身体とは異なり、一定の拡がりを持ちながら我々を取り巻く環境との相互作用の中に成り立っている。また、はたらきとしての身体は、道具などに仲立ちされて延長・拡大するとともに、他者との相互作用の中で間主体的な共同性を帯びる。市川が「身」と呼ぶこうした主体たる身体は、環境により意味的に分節されると同時に、自ら環境を分節しながら、外界との相互作用を通じて「自己組織」する。[1] 外界の認知に直接的影響を与える身体のこうした分節機能である「身分け」は、市川が「向性的構造」と呼ぶ意識下ではたらく身体のはたらきの統合作用に依拠している。

個人をとりまく環境の状況把握とその心的表象の生成に関わる自律的身体機能については、生態心理学や精神医学からの知見によりその存在が示唆されている。具体的には、対象や環境についての我々の認識が運動や姿勢といった身体的側面と深く関わりをもち、情動やイメージの生成が身体の内部感覚に根ざしていることを、佐々木(1987)やワロン(Wallon, 1956)が指摘している。例えば、佐々木(1987)は、イメージをつくり出す身体の根源的「動き」として「姿勢」の重要性を強調する。佐々木によれば、我々の外界との結びつきを媒介する身体の「動き」のうち、身体各部およびそれらの細部の間の相互の関係として現れる「姿勢反応」は、内的要因により「筋の緊張の波」(p. 121)といった微細な動きとして引き起こされるが、一般に「姿勢」と呼ばれる自己塑形的なこの動きが、

知覚的な調節や予期としてのイメージを作り出す認識の基礎となっている。また、ワロン(Wallon, 1956)はこうした「姿勢」の心的実現としてはたらくのが「情動」であるとし、この姿勢-情動系は状況の多様性に応じて分化・分節し、その多様性を反映したものになると説明している。イメージや情動の生成原理が身体と環境との相互作用に深く関わっていることを明らかにしたこれらの知見は、我々の生活世界の認識やそれらと結びついた情意の形成などの意識的側面が先意識的レベルでの身体の自律的なはたらきに大きく影響されていることを裏付けている。

さらに、こうした身体の自律的はたらきが、特に対面状況で我々の他者との関係生成と大きく関わっていることが様々な分野の身体性をめぐる議論の中で指摘されている。広く知られるとおり、現象学ではメルロ＝ポンティ(Merleau-Ponty, 1960)による間身体的な主体間の相互作用の存在の呈示が、恣意的な働きかけとは別な身体のレベルでの対他者関係生成の可能性を示唆した。我が国では山口(2002)がフッサールの「匿名的身体性」の概念に言及し、乳幼児期の自他非分離的な身体性の共有が成人間のコミュニケーションにも持ち越され、言語による意識的なコミュニケーションに先だって関係構築の素地としてはたらいていることを指摘している。市川（1992）も、我々が生来「自己」と「他なるもの」との未分化な「原初的共生」と呼びうる他者と共有可能な身体性を有し、これが意識的および無意識的な対他的同調行動の基盤となっているとしている。こうした自他非分離的な身体性は、もらい泣きに見られるような他者の感情の直接的な伝播〈山口, 2002）や、情動を伴った緊張、弛緩、身構えといった姿勢反応が我々の間に伝染する現象〈佐々木, 1987)などにも現れる。

上述したように、このような間身体的な同調・共鳴による共感や関係生成を、清水(2000)は「遍在的自己」のはたらきによるものとして説明し、身体動作や生体リズムの共振的引き込み現象であるエントレインメントを個人のあいだに「場」が生成するしるしの一つとして論じている。このように、「場」の生成における「身体」とは、意識に先行して環境に浸潤し、外界の状態に応じて自律的に自らを分節しながら、外界から得た情報を統合された表象として意識活動に反映させる自律的な身体のはたらきを指すとともに、時空間を共有する個人間においては、関係の自己組織の基盤となる直接的な情報授受のための共有された身体の様態としてとらえることができる。

4.「場」における身体的コミュニケーションによる共創

「場」の理論を実際の個人間の協働や組織経営に応用し、協働的行為の創出や知識創造などの共創の原理として「場」のはたらきをとらえ、そのための情報伝達と共有の媒介として「身体」を位置づける研究や実践が様々な分野で行われている。

三輪(2000)は、二者間のコンテクストの共創に身体的インタラクションがどう関わるかを検証するために、車いすの搭乗者の頭部に装着されたカメラを通じた映像のみを頼りに、もう一人が車いすを押して操縦するという協働に影響する要因を調べる実験を行った。その結果、多くのケースで一定の回数を経ると意識的な調整操作なしにスムーズな移動が急にできるようになるという創発的展開が起きていること、さらに、スムーズな移動がある場合には両者の視線移動のパターンには高い相関があるだけでなく、操縦側が搭乗側に先んじて視線を進行方向に向けることが明らかになった。三輪はこれを両者の間にコンテクストが共有された結果、行為についての双方の仮説が整合性を生むためであると結論づけ、これを可能にしているのが両者間における自他非分離的関係の生成のための身体的コミュニケーションであるとしている。

組織における知識創造に「場」の理論を応用し、そのプロセスを実例をもとに考察したものとして、Nonaka & Takeuchi（1995）、露木（2003）などがある。組織経営における共創的知識創造についてこれらの研究が共通に指摘するのが、共創の現場における当事者間の「暗無知」の交換と共有の重要性である。その具体例として、企業内の部署間や顧客との密度の高い対面コミュニケーションが、製品開発やサービスの向上といった知識創造につながった事例が両者により紹介されている。

こうした暗黙知による身体レベルでのコミュニケーションに基づく個人間の自己組織的な関係生成が多文化的状況でも起きうるかを調べるために、稿者が在米企業で働く日本人を対象に行ったインタビュー調査（Kono, 2008）の結果から、対象者たちによるアメリカ人との職場空間の共有および職場外での非公式なつきあいを通じて良好な関係構築がなされ、互いの意思疎通が容易になったことが示唆されている。また、エンジニアなどの技術職同士では、アメリカ人との言葉による意思疎通が不十分であっても、問題解決のための検討と作業のプロセスを共空間内で共有することで創発的に技術的な問題の解決がなされるケースがあることが報告されている。

こうした実験および事例研究から得られた知見は、「場」的原理による共創的行為においては、身体レベルでのコミュニケーションが共通の文脈を生み出し、これが創発的共創の強力な要因となりうること、さらに、そうした協働行為が認知の言語文化的な枠組み超えて起きうることを示唆している。

5.「場」における言語と身体性の関係

5.1 言語の身体的側面

それでは、「場」におけるコミュニケーションのこうした身体的側面に対し、言語はどのような機能的類縁性および補完性を持ちうるのだろうか。これについては未だ実証的研究は存在しないと思われるが、上で述べた「はたらきとしての身体」観と関連した身体論からの考察が、「場」における言語の役割について一定の示唆を与えてくれる。

まず、言語自体が持つ「身体的」側面が、間身体的コミュニケーションにおける暗在的情報のキャリアのひとつとして位置づけられうるという点である。ジェスチャーなどの身体表現を含む「記号」としての言語はその表出・発話行為としての身体動作と切り離せない。そうした身体動作は、記号の意味内容とともに、表出行為を成り立たせている身体の機能的側面自体に関わる情報も同時に伝えているが、これは音声言語においても顕著に表れると考えられる。たとえば、佐々木(1987)は、我々の言語音には母音と子音の連続した組み合わせのパターンとしての「分節的側面」と、音の高低、強弱、音調からなる「超分節的側面」が併存しているとしたうえで、従来の言語研究および言語と記憶との関連に関する研究では後者はいわゆる「意味」の構成要素から除外され、ことばを構成する周縁的な側面としてとらえられてきた事実を指摘している。そのうえで佐々木は、自他の実証研究の結果に言及しながら、歌う・語る・唱えるといった「からだの場」としての韻律化が、言語の超分節的要素として実際には言葉の記憶に大きく寄与していると結論する。同様に、鎌田（1990）は、我々の発する言葉が、単なる音韻素性の恣意的組み合わせではなく、「言霊」の概念にみられるような音そのものの持つゲシュタルトの集積であることを強調する。また、竹内（1988））は、コミュニケーションの相手に向けて自然と発せられる「ことば」は、手などの体の部位が相手に向けられ触れるのと同様な効果と意味を持つという点で「からだ」の一部であり、話し言葉としての「ことば」がしばしば集団で共有されたリズムやメロディを伴って使われてきたことには、意

識されない言葉の共生的側面が関わっていると述べる。こうした一般に見すごされがちな言語の身体的側面は、その非記号的な性格から知的プロセスを介さずに相互に働きかけ、その共有可能性から「場」の生成をとりもつ自他非分離的な関係性を主体間に形成するのに寄与しうると考えられる。

個人間の関係生成における言語の持つもう一つの身体的側面は、言語の叙述機能による情意的同調作用の惹起である。市川(1992)は、我々の他者への感情移入や共感が、前意識的な感覚－運動レベルでの他者への同調作用である「感応的同調」に基づいているとし、対面状況では他者の動きや構えの自己の身体による素描といった形でみられるこうした同調現象が、さらに高次の段階では「概念」によって「行為」を先取りした形で言語などの記号表現を介して行われうると述べる。例えば、文学作品で言語によりなされる表現が、読み手に概念やイメージを喚起し、作品の世界に没入させたり作中人物との同一化を引き起こすのは、単なる約束事としての記号体系を超えた、言語の持つ感応的同調作用を誘発する「魔術的強制力」によるものであり、ここには能動的に世界に語りかける言語による「仲立ちされた」身体のはたらきが存在する。

5.2 「場」における身体への言語の補完的側面

「場」における協働を通じた創発（共創）において、言語による概念化が創発プロセスの身体的側面を補完する機能を持ちうることが野中・紺野(1999)により指摘されている。先にふれたように、組織経営における「場」を知識創造の基本原理とした論説では、まず個人間に身体レベルでの暗黙知の共有がなされていることが共創の前提とされるが、野中らによれば、組織における「場」に基づく知識創造が具体的な協働に結びつくためには、暗黙知の共有プロセスである「共同化」に加えて、共有された知識を言語や図像により「形式知」として概念化する「表出化」、さらにはそうした形式知を結合して新たな形式知をつくる「結合化」のプロセスが必要となる。

市川(1992)も、組織的共同労働においては、協働が一定の秩序をもった一連の作業として成立するには、何らかの形の表出による行為の対象化を通じて協働の意味と個人の役割を個々の成員に自覚させることが必要であると論じる。市川は、こうした自他の行為の意味の自覚的理解があってはじめて身体レベルの同調による協働が可能となると指摘している。

個人による身体知の獲得プロセスにおける言語の補完機能については、諏訪(2005)が、自ら行った一連の実験の結果を踏まえて、自己の行為についての認知を言語により概念化することで、身体的行為を通じた技術などの獲得プロセスが促進されるとの仮説を提示している。諏訪によれば、それまで知覚できなかったものを知覚できるようになるには、身体と環境との間に新たな構造的関係が必要となるが、新たな技術の習得などに関わる「身体知」は一般には言語化できない暗黙知の領域にあるとされるため、これを概念化することの意義が顧みられることが少なかった。しかし、実際には、優れたスポーツ選手がしばしばそうであるように、技術の熟達などのより高いレベルの身体知の獲得には、身体知自体の再構成がしばしば求められる。また、現実の状況では環境的要因は変化し、定常的な技術の内在化だけでは対応できない（社会における対人関係もこれに該当するであろう）。こうした変動要因に対応するために必要なのが言語による自己の認知の客体化だと諏訪は主張する。つまり、言語化により技術的問題に関わる本質的な変数が明確化されるとともに、対象化された要因間の関係性が理解されることで、さらに高度な熟達のために必要な意識的行為の対象が明確になるというのが諏訪の論旨である。諏訪が「メタ認知的言語化」と呼ぶこの自己の認知の言語による概念化のプロセスの重要性に関する議論は、「身体」に映した「場所」の状態の変化に応じて自我的自己が主体となって選択的に自己表出をしていくという、清水の「場所的自己言及」

の論理と整合するとともに、野中らの「表出化」と「結合化」における言語の意味を、個人としての行為と認知のプロセスと関連づけて説明するうえで有効な材料となるであろう。

6.「場」における身体性の研究に関する今後の課題

コミュニケーションにおける「場」と身体性の関連性については、哲学、自然科学、社会科学など複数の領域からの知見を組み込んだ学際的なアプローチにより理論レベルではある程度の体系化が可能であろう。今後は、こうした理論的枠組みに基づいた実証的な研究を通じて、「場」における身体性の性格と機能の学術的な記述が求められる。その際、主体と場所との直接的相互作用のなかでのみ自覚されるという「場」のはたらきの性質上、研究者は単なる観察者であってはならず、自ら「場」に包摂されながら「場」を記述する必要がある。そのための方法論と「場」のはたらきを記述するためのツールとしての「言語」の開拓が急務である。

註釈 1. 市川(1992)は、「身」と環境との間のこうした両義的分節・被分節関係の例として、天気などの外界の状況が我々の気分に影響し、一方で気分が外界の認知を情意的に色づけることに言及している。

参考文献一覧

市川　浩（1992）『精神としての身体』〈講談社学術文庫〉講談社

鎌田東二（1990）『記号と言霊』青弓社

Kono, H.（2008）. *Ba in the American context: An exploration of Japanese in U.S. workplaces.*.Unpublished master's thesis, University of the Pacific. Stockton, CA

河野秀樹 (2010) 「共空間内〈場〉生成課程における身体性の性格と機能についての理論的考察」『目白大学人文学研究』7:37-59

Merleau-Ponty, M. (1960). *Signes.* 竹内芳郎監訳 (1969) 『シーニュ１・2』　みすず書房

三輪敬之（2000）「共創における生命的コミュニケーション」 清水博（編）『場と共創』(pp.273-338）NTT 出版

野中郁次郎･紺野登（1999）『知識経営のすすめーナレッジマネジメントとその時代』 筑摩書房

Nonaka, I., and Takeuchi, H.（1995）. *The knowledge creating company: How Japanese companies create the dynamics of innovation*. New York: Oxford Press.

Polanyi, M. (1966). *The tacit dimension.* 高橋勇夫（訳）『暗黙知の次元』筑摩書房

佐々木正人（1987）『からだ：認識の原点』東京大学出版会

清水　博（1996）『生命知としての場の論理：柳生新陰流に見る共創の理』中央公論社

清水　博（1999）『新版　生命と場所　創造する生命の原理』NTT 出版

清水　博（2000）「共創と場所:創造的共同体論」 清水博（編）『場と共創』(pp.23-178）NTT 出版

諏訪正樹（2005）「身体知獲得のツールとしてのメタ認知的言語化」『人工知能学会誌』20, 5: 525-532

竹内敏晴（1988）『ことばが劈かれるとき』筑摩書房

露木恵美子.（2003）『場と知識創造』 北陸先端技術大学院大学博士論文

Wallon, H.（1956）. Importance du Mouvement dans le development psychologique de l'enfant. *Enfance*, *1*, 235-251. 浜田寿美男（訳編）『ワロン/身体・自我・社会』(pp.138-148)　ミネルヴァ書房

山口一郎（2002）『現象学ことはじめ　日常に目覚めること』日本評論社